

において重要な表象として「巡礼墓」が指摘できる。サンティアゴ巡礼路には巡礼途上で命を落とした人々の墓がいくつも作られている。ピレネー山中には二〇〇二年に亡くなった日本人巡礼者の墓が、レオン近郊には朽ちた自転車をもチーフにしたドイツ人の自転車巡礼者の墓があり、そうした場所には必ずといって良いほど花や石が添えられている。また、間違いやすい分かれ道には正しい道へと導く矢印や目印が造られている。要所に建てられた十字架には、必ずその足元に無数の石が積まれている。こうした行為は、ある巡礼者が直接には接しない過去と未来の巡礼者も含めた他者とのコミュニケーションを目指すものとして理解できるだろう。そして、巡礼墓は自らにも訪れうる死を〈可能態〉として教唆し、それによって巡礼同士の紐帯を補強する場として位置づけられるように思われる。

## 聖地旅行をめぐる「支え合い」の歴史

—— 高齢者・障がい者の事例 ——

板井正斉

本研究の目的は、「誰でももの祈り」としての高齢者・障がい者の聖地への旅行と、それを支える地域住民のボランティアから、「聖地らしさ（オーセンティシティ）」の現代的な多様性を宗教学の立場から明らかにすることである。

聖地を訪れる巡礼者への対応をテーマにした研究では、四国遍路における「巡る」人々と「巡られる」人々との関係性が

ら、日常的実践としての「接待文化」を明らかにした浅川泰宏の研究がある。さらに、高齢者や障害者と巡礼の関係性については、寺戸淳子によって、現代カトリック巡礼の象徴的な聖地であるルルドでの傷病者巡礼の体系化がなされている。二つの先行研究を本研究の関心にひきつけるならば、浅川は、四国遍路の巡礼者接待習俗である接待を徹底的に問い直すことで、従来解釈されていた主体的で自覚的な動機による美的な意味づけに対して、「意識されない慣習的行動すなわち実践 (unseen practice)」としての接待」を見出した。寺戸は、オスピタリテによる支援活動を単なる巡礼支援団体とは見ずに、共和国の崩壊に対するカトリック世界の対抗的性格を指摘しつつ、上流階級の男性による公的慈善として始まった活動が現在は、「私人としての男女が公開空間で行なう、見ず知らずの他者に向けて開かれた活動」に変化していることを言及する。

そこで本発表では、これまで発表者が見てきた伊勢神宮参拝における参拝ボランティアを事例として、四国遍路の接待や、ルルドのオスピタリテの深層に類似要素があるのだとすればそれはどのようなものか、またそこに日本人的なボランティアム、いわゆる「支え合い」とのつながりを、歴史的な高齢者・障がい者の伊勢参宮に注目して考察を加えた。

結論からすると高齢者・障がい者の伊勢参宮について、様々な視点からその実態を探ってみたが、ここまで直接的な記録は見出せていない。膨大な史料の一部を見たに過ぎず、今後丁寧に見えていく必要はありつつも、仮に見出しにくいとするならば、それはどのような意味を持つのだろうか。例えば、四国

遍路の「接待文化」との相違点として、伊勢参宮の場合、「施行文化」と言えるほどの歴史的な継続の実態がないことがあげられる。もちろん、施行というキャッチフレーズを現在、使用する観光や行政関係者はいるものの、その概念の一般化普遍化についても丁寧な把握が必要である。

それでも、見てきた間接史料を重ねることで、巡る人々や巡られる人々の多様性はうかがえる。施行に対する肯定的な対応に対して、規制を強めていくような葛藤も確認できた。この点は、四国遍路に捉えられた日常の実践としての接待文化にも通底する点かもしれない。しかしながら、その対象に高齢者・障害者をはつきりと捉えられてはいない。

繰り返しになるが、伊勢参宮の史料からは、ルルドのオスピタリテ活動のような歴史的脈絡は見出しにくい。このことは、現在の参拝ボランティアと、伊勢の施行との脈絡の違いを考えなければならぬことを指摘したい。

いずれにしても、現段階では歴史的な実態を考察するために、関係する史料を広げだしたにすぎない。さらに丹念に目を通すことで考察を深めたい。

## 身延山参詣記にみる巡拝寺院について

望月真澄

身延山信仰を捉える視点として、身延山内に残る江戸信徒関

係資料について考察したことがある。本発表では、江戸からの身延山参詣道中に着目し、途中の巡拝寺院に伝わる資料を紹介し、身延山参詣における巡拝寺院の役割と身延山巡拝信仰の特徴について考えてみたい。今回は、江戸から甲州廻りの道中における巡拝寺院を検討することにする。

江戸より身延山に登詣する大きな道程は二つある。一つは、江戸より甲州街道を進み、甲府から身延道を南下する道程であり、もう一つは、東海道を西に進み、富士地域から身延道に入り、北上する道程である。この二つの参詣道の中でも、盛んに参詣された道程は、江戸より甲州街道を経て進む道で、身延山に参詣すると帰りは身延山より岩淵(富士川町)へ下り、東海道を進む道である。これは、近世後期の双六にも登場するほどの代表的な参詣道で、江戸からの身延山登詣の道中日記をみても、おおかたはこの道程をとっている。

この参詣道の途中には、日蓮宗寺院や日蓮ゆかりの場所を巡拝する参詣路がとられ、これが参詣記に紹介されている。数々の参詣記には、堀之内妙法寺、休息立正寺、石和遠妙寺、甲府信立寺、甲府遠光寺、増穂昌福寺、小室妙法寺といった寺院が登場する。この他にも参詣途中に法華寺院を巡拝している場合がみられる。そこで、地誌類にみられる日蓮宗寺院関係記載と江戸講中関係資料や道中途中の寺院の性格についてみてみたい。

①堀之内妙法寺(東京都杉並区)は、道中記に、厄除け祖師を祀る霊場であり、行事の折には賑わっていたことが知られる。

②勝沼立正寺(甲州市休息)は、道中記に日蓮が甲斐国布教の